

大学と連携した情報リテラシー教育に係る教材開発と授業実践

函館市立赤川小学校 学級数7 (校長 長浦 紀華)

I 実践テーマの趣旨

本校の校区内には、システム情報科学部を有する公立はこだて未来大学があることから、1人1台端末の導入を機に、児童がネットトラブルを疑似体験しながら、情報リテラシーを身に付ける授業の実施に向け、大学と共同で教材を開発し、第6学年児童に対し、大学生と連携した授業実践に取り組んだ。

II 実践の概要

1 大学と共同による教材開発

はこだて未来大学の3年生が取り組んでいるプロジェクト研究とコラボレーションし、大学生が取り組みたい研究と本校で実施したい授業の合致点を探りながら、教材開発に取り組んだ。

主な役割分担としては、教材(デジタルコンテンツ)の素案の作成を大学生が、開発した教材を用いた授業の構想を本校の教員が担い、本校児童の発達の段階に応じた教材となるよう協議を重ねた。

回	月	打合せ内容
1	5月	・顔合わせ ・大学側のプロジェクト研究の方向性及び研究内容に係る案の説明 ・小学校側より大学の共同研究に係る内容や進め方への要望の説明 ・研究内容のアウトラインの確認
2	6月	・1回目の打合せ内容を踏まえた研究内容の確認 ・教材開発の方向性の決定
3	7月	・情報リテラシーに係る教材の素案について協議①
4	9月	・情報リテラシーに係る教材の素案について協議②
5	10月	・情報リテラシーに係る教材の素案について協議③
6	10月	・情報リテラシーに係る教材の完成 ・授業の進め方の協議
7	11月	・授業実践



教材は上記のQRコードからアクセスし、取り組むことができる。

2 大学生と連携した情報リテラシーに係る授業実践

第6学年の特別活動において、2時間扱いで授業を行った。全体の進行を学級担任が行い、開発したデジタルコンテンツを活用した説明や演習を大学生が担った。既に自分専用のスマートフォンを持ち、SNSを利用している児童も複数いるが、まだネットトラブルに巻き込まれたことのある児童はいないこともあり、授業の導入では、ほぼ全ての児童が自分にはネットリテラシーが十分身に付いていると回答したものの、ネットトラブルの疑似体験をとおり、自分の判断が十分ではないことを自覚し、対処方法等について真剣に学んでいた。

授業後の振り返りでは、「インターネットは便利な分、使い方を間違えると相手に不快な思いを与えてしまうので、正しく使いたいと思った。」「情報を伝える時は、感情を分かりやすく伝えることや、投稿する前にしっかりと考える必要があることが分かった。」「インターネットの正しい使い方をクイズなどで学ぶことができて分かりやすかった。」という感想が寄せられ、ねらいを十分に達成できたと考える。



【大学生による説明】

III 実践の成果(○)と課題(●)

- はこだて未来大学の学生が得意とするデジタルコンテンツ作成の技術力と、本校の教員の授業構想力とを組み合わせることにより、児童が必要感をもって学ぶことのできる教材を開発し、児童が楽しみながら学ぶことのできる授業を行うことができた。
- 大学生が作成したコンテンツをクラウド化したところ、函館市のセキュリティとの関係で児童の端末で一部、稼働することができなかったことから、関係課と連携して調整を図る必要がある。